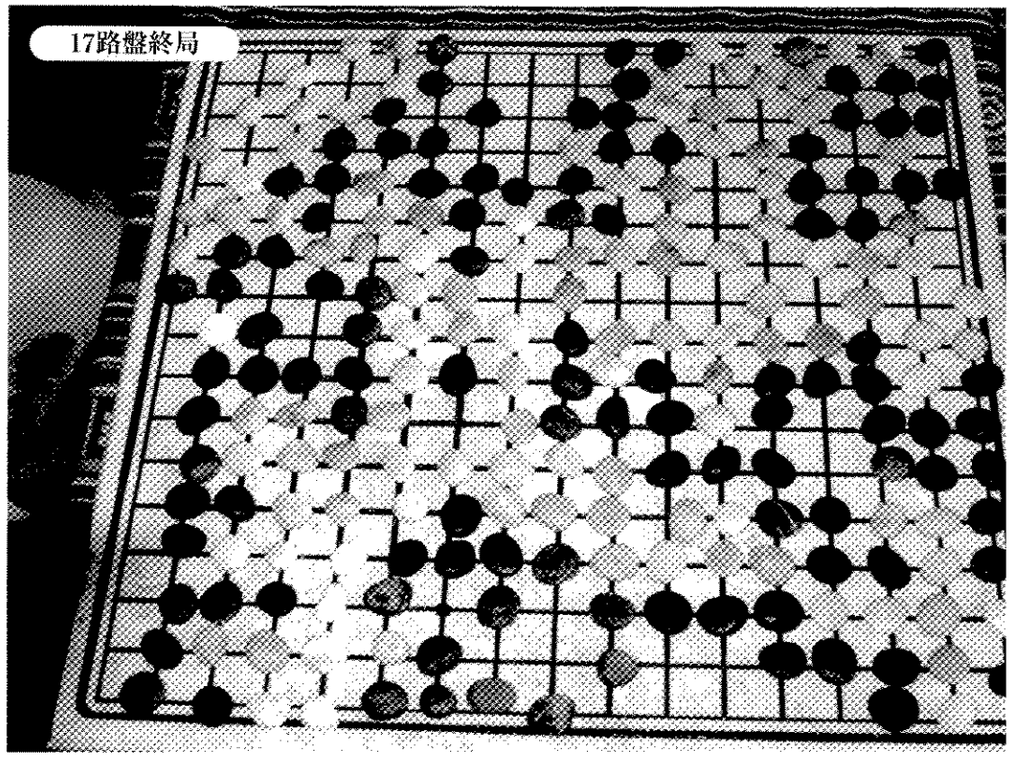
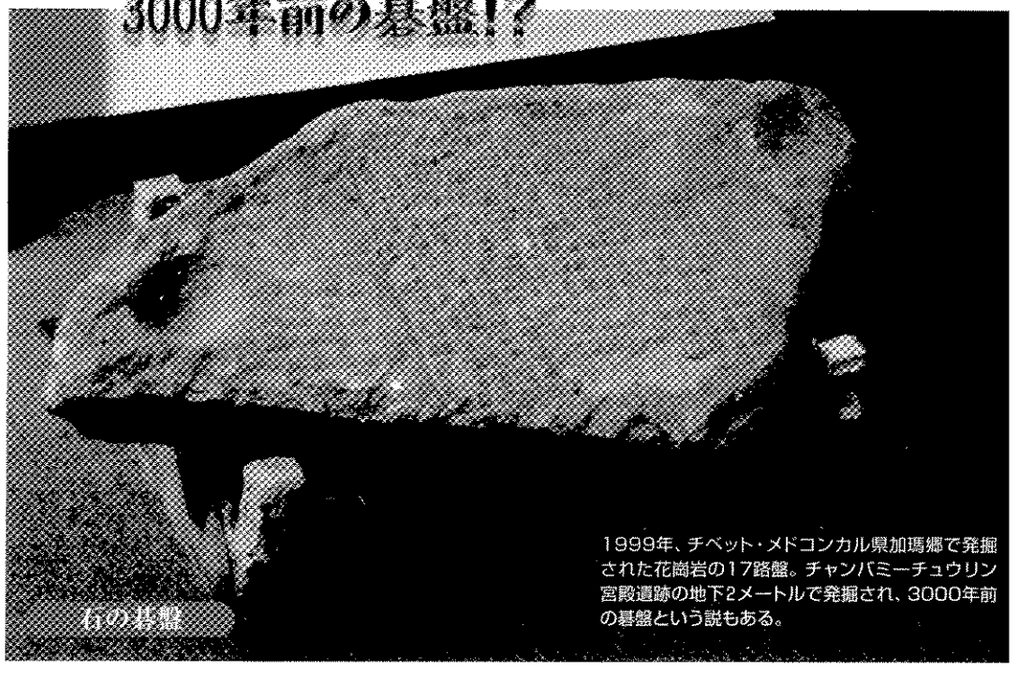


↑ チベットルールによるプロ初対局（白・江鏑久九段対岳亮四段）の終局図。大理石で作られた17路盤。碁石は長江上流の金沙江で採取されたため、形は大小さまざま。対局場は雲南省迪慶チベット族自治省シャングリラ（中国）の古城棋院。



1999年、チベット・メドコンカル県加瑪郷で発掘された花崗岩の17路盤。チャンバミーチュウリン宮殿遺跡の地下2メートルで発掘され、3000年前の碁盤という説もある。

碁盤のルーツに迫る チベットの十七路盤

一九九九年、チベットの墨竹工卡（メドコンカル）県加瑪郷の強巴米久林（チャンバミーチュウリン）宮殿遺跡の地下およそ二メートルで、十七路盤の碁盤が発見された。

密芒（ミマン）と呼ばれる17路盤のチベット碁については次号で詳しく紹介するが、今ではこのルールを知る人も打つ人もほとんどいなくなっている。そのため、発掘者は最初、十七路盤と一緒に発見された陶器の方を注目したそうだが、その後、花崗岩で作られた十七路盤の重要性に気づいた。

発掘された石盤は長さ百十五センチ、幅五十六センチ、厚さ二十センチの菱形の石で、縦横ともに四十四センチの十七路盤。両端には碁石を入れる窪みがある。

古代の囲碁は現時点ではどんな碁盤を使い、どんなルールで打たれていたか分からないことだらけで、判明していることは少ないが、これまでに発見された碁盤や盤上の星の数、文献から次の三つの系譜に分かれている。

古代中国の碁は碁盤が十七路盤五星と十九路盤五星。古代チベットの碁は十七路盤十三星？（グラビアの大理石盤は十二星）。古代朝鮮の巡将碁（スンジャン・パドック）は十九路盤十七星（正倉院所蔵の木画紫檀碁局）。この三つの碁法はいずれも星に石を置いて打ち始める互先置き石制。古代の囲碁は発生した時期、星の数や石を置くルールが重要な意味を持っていたに違いなく、囲碁の生い立ちを考える手掛かりである。

日本では先の三つの碁法のように石を置いてから打ち始めたか、算砂の時代のように石を置かずに打ち始めたのかわかっていないが、正倉院には十九路盤九星の碁盤も所蔵されていて、これも合わせると古代囲碁の系譜は四つに分かれることになる。

これまでに発見された碁盤の中で一番古いのは、私が知る限り河北省望都で発見された十七路盤（石盤。五星）で、二世紀頃とされている。

チベットで発掘された石盤は一説に三千年前のものだという。ただし、現時点では謎だらけで、今後、科学的な分析も含めて詳細に研究されることになろう。発掘された場所の強巴米久林宮殿遺跡は吐蕃王国のソンチェン・ガンポ王の出生地。仮に三千年前であろうと千三百年前であろうと、大変な発見であることには変わりがない。

いずれにしても隋唐の時代には、チベット碁は盛んに打たれていたことが記録に残っている。雲南省迪慶チベット族自治省では、優れた文化遺産であるミマンの碁を後世に伝える運動と共に、その歴史研究も始まった。そんな気運の中で「第一回香格里拉（シャングリラ）〝高山植物園〟チベット盤上ゲーム体育文化祭」が六月二十一日から二十三日まで行われ、初めてプロによるチベットルールの碁が打たれた。

（大島正雄）